

戦前期日本におけるコメニウス言説再考 3

相 馬 伸 一

〔Abstract〕

This thesis is part of comprehensive survey of discourses of J. A. Comenius in prewar Japan. When national education system, one of the main agents of the formation of nation state was established in mid 19th-century Japan, Czech thinker in the 17th century, Comenius was introduced as a precursor of modern education. More detailed examination on the process is expected for the deeper understanding of the acceptance of Western education in Japan.

Through examining the books and magazines mainly concerning education published up to 1945, the author discovered more than 20 articles about Comenius, which have not been mentioned in the previous survey. In this series of theses, the author lists them up and reconsider the process in which the interpretation of Comenius changed and diversified. This thesis pays special attention to the articles and books appeared in the period from 1895 to 1906.

キーワード：コメニウス，西洋教育受容，教育思想史，メタヒストリー

はじめに

本稿は、『佛教大学教育学部論集』第31号（2020年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考」および『佛教大学教育学部学会紀要』第19号（2020年3月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考2」の続編である。

17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・コメニウス（Johannes Amos Comenius, 1592-1670. チェコ語表記では、ヤン・アモス・コメンスキー（Jan Amos Komenský））は、教育

以外でも神学・哲学・自然学・歴史・文学・言語・政治等にわたって重要な事績を残している。しかし、欧米各国で国民教育制度が成立した19世紀、教員養成の教科書として書かれた教育史（教育思想史）において近代的な教育の先駆者として記述され、コメニウスは日本ではもっぱら教育家としてあつかわれてきた。ここには、歴史が書かれるのにもともなう歴史的問題、いわばメタヒストリーの問題がある。本研究は、明治からおおよそ1945年までに発行された書籍や雑誌記事に現れたコメニウスに関する言説を現れた順に再構成し、調べがつかない限りで概要等を付して若干の考察を加えるものである。井ノ口淳三氏（追手門学院大学名誉教授）によって日本教育学学会紀要『教育学研究』第44巻第3号（1977年）、『追手門学院大学人間学部紀要』第8号（1999年）及び日本コメニウス研究会年報『日本のコメニウス』（第1号、1991年～第20号、2010年）に発表された目録に未収録の論考については「*」を付す。また、教育史（教育思想史）の通史テキストのように、コメニウスを中心的にあつかったもののうちで紹介に値すると考えられるものは「番外」としてあつかう。

本稿では、最初に前稿で考察が不十分であった点を補ったうえで、1895年から1906年までで確認できた論考をあつかう。本来は紙数が許す限り紹介を進めたいところだが、2020年春からの新型コロナウイルスの感染拡大により、公共図書館や大学図書館の閉鎖や入館制限が続き、調査の進捗は思うにまかせなかった。このため、調査未了の地方教育会誌等には本稿があつかう期間から以前の未確認の論考や記事が存在するかもしれないが、それらについては次稿以後で補い、いずれ整序することしたい。

再掲：本庄太一郎編、『教育古典』（普通教育全書第13編、博文館、1894年1月。）

前稿で本書をとりあげた際、迂闊なことにその典拠について考察しなかった。また、分量的にも多く、本書の記述自体が後に著された論考に影響を与えた可能性もある。そこで、本書について再度考察しておく。

教育ならびに教育学の古典的な作品は、教員養成が制度化し、教育史や教育思想史がそれほど巨大とはいえずともひとつの出版市場となっていくなかで、定期的に出版されるようになったと考えられる。

本書も博文館の「普通教育全書」の1巻であり、著者の本庄太一郎は、全書3の『歴史教授法』（1892年）、全書5の『地理教授法』（1892年）、全書8の『児童心理學』（1892年）の執筆に関わっている。また、同全書には教育哲学・教育史関連で全書10の『教育史』（高橋章臣、1893年）がある。

こうした叢書類は、その範を西洋にとったものと考えられるだろうが、西洋教育思想の受容の検討にあたっては、本来はその点を最初におさえておくべきであった。それは近いうちに進めることにするが、ここではまず本書の典拠について検討しておきたい。結論からする

と、本稿執筆時の環境的制約もあって、十分な調査ができず、典拠の確定には至らなかった。しかし、ここに記すのは、他のコメニウスに関する論考の典拠を考える際の示唆が得られたからである。

本書は、前半でコメニウス、後半でヘルバルトをあつかっているが、ヘルバルト編の最後に、「以上は普通教育学の要旨にして、専らリヒター氏の著書より之か材料を取れるものなり」（223頁）とある。これを手掛かりにすると、「教育学蔵書」（Pädagogische Bibliothek）という叢書が出てくる。副題には、「古今の最も重要な教育著作の集成」（Eine Sammlung der wichtigsten pädagogischen Schriften älterer und neuerer Zeit）とあり、出版元はライプツィヒのSiegismund & Volkeningである。1869年から1897年にわたって21巻が出版され、カール・リヒター（Karl Richter、生没年の調べつかず）は、このなかのかなりの巻数の編者を務めている。第3巻がコメニウスの『大教授学』、第13巻がヘルバルトの『一般教育学』と『教育学講義綱要』であり、第11巻もコメニウスの他の著作があげられ、その他、フランケ、ザルツマン、ペスタロッチ等のドイツ系の主要な教育思想家の作品が収められている。

さて、本書の後半のヘルバルトについて、リヒター編の「教育学蔵書」の第13巻を典拠と考えてよいかを検討してみる。同書には『一般教育学』のテキストに先立ち、96ページにわたってヘルバルトの伝記や「ヘルバルトの哲学と教育学」と題された学説の紹介がある。本荘の『教育古典』では、ヘルバルトの伝記のあとに第二部「教育に関する学説」があるが、それは「倫理」、「心理」、「世界美観論及普通教育学の要領」の3章構成となっている（この普通教育学とは『一般教育学』をさす）。両者を比べてみると、『一般教育学』が完成した際にヘルバルトが友人のシュミットに送った書簡が引用されているほか、諸著作の紹介も対応している。しかし、リヒターの同書における解説には本荘の『教育古典』に見られるような、ヘルバルトの倫理学や心理学についてのまとまった言及はない。とすると、部分的に参照された可能性はあるが、全面的に依拠しているとはいえない。

では、「教育学蔵書」第3巻の『大教授学』はどうだろうか。まず、この点で問題になるのは版である。同書の1871年版、1872年版、1876年版を確認することができたが、1876年版は四訂版とあり、以前のものとは序文の説明が大きく異なる。この四訂版の序文の著者は、最初にチェコ語でコメニウスの伝記を著したフランティšek・ゾウベクである。ここでは、コメニウスの生誕地がニヴニツェとされているほか、死後におけるコメニウスの著作の出版に関しても言及されるなど、100ページにわたる記述は相当に詳細である。しかし、本荘による伝記的解説にコメニウスの著作や書簡の抜粋が織り込まれているのに対して、ゾウベクの紹介にはそれがない。ゾウベクの解説の後には、『大教授学』のドイツ語訳の前に、訳者であるユリウス・ベーゲルによる長文の解説があるが、本荘による『大教授学』の解説の構成とは対応しない。本荘の記述中でコメニウスの著作には英訳の表題が付されており、このことは本荘の『教育古典』の典拠が英文であったことを想像させる。ただ、ゾウベクの解

説には、『千葉教育会雑誌』の第8号から第10号にわたって掲載された「コメニウス氏畧傳」（1882年）で触れられた1874年のプシェロフにおけるコメニウス像の建立について記述されていることを確認できた⁽¹⁾。これは、「コメニウス氏畧傳」の典拠と著者を考えるヒントになる。

さて、この当時に入手可能な英文による教育学古典の叢書があったのだが、インターネット検索を行ったところ、ニューヨークの出版社E. L. KELLOGG & CO.による25巻の叢書『教師必携蔵書』（Teachers' Manual Library）と行き当たった。教師が手軽に読むことのできるシリーズで、発問の仕方、学校での実務、教授法等のマニュアル本とともに、ペスタロッチ（第15巻）、バゼドウ（第16巻）、コメニウス（第17巻）、ペイジ（第20巻）、ルソーと『エミール』（第21巻）、ホーレス・マン（第22巻）、デューイの『教育学的信条』（第25巻）といった教育哲学・思想系の書籍も含まれている。ここで目につくのは、ハーバート・ラング（Ossian Herbert Lang, 1865-1945）という人物である。コメニウスをはじめ、バゼドウ、ルソー、ホーレス・マンの巻を1891年から93年という限られた時期に集中して著している。

『コメニウス——生涯と教育著作』（*Comenius : his Life and Educational Work*, 1891）は26頁の薄いものである。コメニウスの出身地はウヘルスキー・プロトになっているが、ニヴニツェ説も注記されている。しかし、本荘の『教育古典』に見られる英語表記に関しては、The Moravian Brethrenは対応しているが、『開かれた言語の扉』の「言語」をラングはTongues、本荘はLanguagesと記しており、対応しない。また、青年期のドイツでの修学について、ラングの記述は簡潔にされているが、本荘の記述はより詳細である。また、もっとも大きな問題は、本荘が『大教授学』の概要紹介にページを割いているのに対し、ラングの著作にそうした記述はないことである。したがって、ラングの著作も本荘の『教育古典』の直接の典拠とは考えにくい。これよりも詳細な英語による教育古典の叢書類を探し出して検討する必要がある。ただ、ラングの著作には、ゾウバクと同様、没後200年を契機としたコメニウス再評価に関する言及がある⁽²⁾。さらに古い英語による言及があった可能性は否定できないので、今後も調査を続けていきたい。

最後に本書の記述が後の日本におけるコメニウス受容に影響を与えた可能性もあるので、ここでの『大教授学』（本荘は『教授大学』と訳）のとりあげかたを整理しておく。

敬虔の教授法をみつかった『大教授学』の第24章、非キリスト教的テキストのあつかいを論じた同第25章に触れられていないのは、西洋教育思想受容の世俗主義的特質の現われといえよう。本荘の解説の第4章第6節の「教室に於ける教師の心得」の19条の最後の2条は『大教授学』第19章18～20節とほぼ対応しているが、それ以前の17条は『大教授学』のテキストの各所から採られたようである。これが何らかの海外の二次文献に依拠したものなのか、あるいは本荘の工夫によるものなのか、今後、留意しながら調査していきたい。

章	表 題	細 目	『大教授学』での対応箇所
1	教育全般の目的	5条に要約	第1章～第5章
2	教授の原理	6条に要約した上、4節で構成 ・確実：9つの原理を紹介 ・平易：10の原理を紹介 ・堅固：10の原理を紹介 ・確実堅固平易の教授に関する学校管理法	第6章～第19章 ・第16章 ・第17章 ・第18章 ・第19章、3、20、44～49節
3	応用汎論	8条に要約の上、補足	・第19章、3～17、21～41、50～54節
4	応用特論	・科学：9条を紹介 ・技芸（外国語を除く）：11条を紹介 ・語学：8条の紹介と解説・敷衍 ・道德教授法：16条のうちの13条を紹介 ・鍛錬：3つの原則を紹介 ・教室に於ける教師の心得：19条を紹介	・第20章、3、15～23節 ・第21章、4～17節 ・第22章、8～19節 ・第23章、3～18節 ・第26章、1～9節 ・第19章、18～20節その他
5	学校系統の一般編成論	四段階の学校論の概説 ・幼稚学校：20の教育課題を紹介 ・童児学校：12の教科、6つの手段を紹介 ・少年学校：三学四科、学級編成の紹介 ・大学校：6条に整理して解説	・第27章、1～9節 ・第28章、1～21節 ・第29章 ・第30章、1～4節 ・第31章

「ペスタロッチ及びコメニウス」（『教育時論』、開発社、397号、1896年4月。）＊

「ペスタロッチ及びコメニウス」（『埼玉教育雑誌』、第153号、1896年年5月。）

「ペスタロッチ及びコメニウス」（『北海道教育雑誌』、第45号、1896年7月。）

「ペスタロッチ及びコメニウス」（『奈良県教育会雑誌』、第25号、1896年8月。）

「ペスタロッチ及びコメニウス」（『島根県私立教育会雑誌』、第122号、1896年8月。）

「ペスタロッチ及びコメニウス」（『山陰之教育』、第21号、1897年2月。）

教授ホルチンゲルによるものとして、14項目にわたってコメニウスとペスタロッチの比較が示されている。訳者は不明である。『教育時論』掲載分については、石橋と清水によるペスタロッチの関係文献目録には記載されている〔石橋・清水1997：70〕。以下、記事の画像をあげ、項番を丸数字で示し、記述について検討しておく。

②、③、⑧、⑨、⑩、⑪、⑭では、当時の教育学の論点に即して両者の教育観が比較されている。②は、コメニウスを客観的自然主義、ペスタロッチを主観的自然主義と位置づける典型的な解釈であり、前稿で触れたリンドネルの同様の解釈ともあいまって、こうした理解が通説化するのに一定の役割を果たしたことだろう。③と⑧と⑨と⑪は、コメニウスを実質陶冶論者、ペスタロッチを形式陶冶論者と見なす解釈である。両者は、ともに感覚経験を重視する直観主義の系譜にあるとされるが、⑧では、コメニウスが重視したのが、挿絵をとりいれた『世界図絵』のような視覚への注目が中心だったのに対して、ペスタロッチは直観の問題を数・形・語へと分類深化したとされている。⑩は、コメニウスが『大教授学』等で学校制度や教育行政について論じているのに対して、ペスタロッチの関心がどちらかといえば教師と生徒の関係にあったことを対比させている。

<p>●ペスタロッツチ及びコメニウス は此の二大教育家を左の如く比較對照せり。</p> <p>教授ホルチンゲル</p>	<p>コメニウスは</p> <p>(一)大學の教育を受けたり。 (二)「外界」の概念を以て、其の教育學の前提とせり。 (三)主として育成材料に對して、興味を有せり。 (四)知力的の人なり。 (五)反省的人なり。 (六)多方濶大にして、語學の知識に富み、思想明瞭、且つ整然たり。 (七)他國語の翻譯家にして、殊に補充的人なり。而して系統的教育學の始祖なり。 (八)觀察材料を以て、其の教授を扶助せり。「オルビスピクトス」を著し、是の故なり。 (九)人を完全にして、知らしめんことを務めたり。 (十)學校の外部の秩序の爲めに、大効を致せり。 (十一)主として人に從ひ、時に從ひ、材料に從ひて、學校を系列せり。 (十二)總合法を取れり。 (十三)主として演繹的なり。 (十四)總べて原由より教へんと欲せり。</p> <p>ペスタロッツチは</p> <p>(一)獨學獨修せり。 (二)「内界」の概念を以て、其の教育學の基礎とせり。 (三)教育作用を、人間心意の諸原力に向けたり。 (四)感情的の人なり。 (五)想像的人なり。 (六)單方狹隘にして、語學の知識に乏しく、文意信屈、且つ不明瞭なり。 (七)主として詩人なり、其の著リエンハル、及びゲルトルド、を見て知るべし。而して是れ又雅文的國民小説の始祖たる所以なり。 (八)形式と數量とを重んじ、之を以て必須なる育成方便なりとせり。 (九)人を完全にして、能ならしめんことを務めたり。 (十)學校の内部の秩序の爲めに、大効を致せり。 (十一)宗教、算術、及び言語の三種主要訓練の、育成價值を重んじたり。 (十二)分解法を取れり。 (十三)全く歸納的なり。 (十四)總べての知識の中樞點は、觀察する所の主觀なりと曰へり。</p>
---	--

図1.『教育時論』第397号の記事（ページをまたいでいる部分を合成）

<p>●ペスタロッツチ及びコメニウス は此の二大教育家を左の如く比較對照せり。ホルチンゲル</p>	<p>コメニウスは</p> <p>(一)大學の教育を受けたり。 (二)「外界」の概念を以て、其の教育學の前提とせり。 (三)主として育成材料に對して、興味を有せり。 (四)知力的の人なり。 (五)反省的人なり。 (六)多方濶大にして、語學の知識に富み、思想明瞭、且つ整然たり。 (七)他國語の翻譯家にして、殊に補充的人なり。而して系統的教育學の始祖なり。 (八)觀察材料を以て、其の教授を扶助せり。「オルビスピクトス」を著し、是の故なり。 (九)人を完全にして、知らしめんことを務めたり。 (十)學校の外部の秩序の爲めに、大効を致せり。 (十一)主として人に從ひ、時に從ひ、材料に從ひて、學校を系列せり。 (十二)總合法を取れり。 (十三)主として演繹的なり。 (十四)總べて原由より教へんと欲せり。</p> <p>ペスタロッツチは</p> <p>(一)獨學獨修せり。 (二)「内界」の概念を以て、其の教育學の基礎とせり。 (三)教育作用を、人間心意の諸原力に向けたり。 (四)感情的の人なり。 (五)想像的人なり。 (六)單方狹隘にして、語學の知識に乏しく、文意信屈、且つ不明瞭なり。 (七)主として詩人なり、其の著リエンハル、及びゲルトルド、を見て知るべし。而して是れ又雅文的國民小説の始祖たる所以なり。 (八)形式と數量とを重んじ、之を以て必須なる育成方便なりとせり。 (九)人を完全にして、能ならしめんことを務めたり。 (十)學校の内部の秩序の爲めに、大効を致せり。 (十一)宗教、算術、及び言語の三種主要訓練の、育成價值を重んじたり。 (十二)分解法を取れり。 (十三)全く歸納的なり。 (十四)總べての知識の中樞點は、觀察する所の主觀なりと曰へり。</p>
---	--

図2.『埼玉教育雑誌』、第153号の記事（ページをまたいでいる部分を合成）

<p>◎ペスタロッツチ及びコメニウス 教授ホルテンゲルは此の二大教育家を左の如く比較對照せり</p>	
<p>コメニウスは</p> <p>(一) 大學の教育を受けた り。</p> <p>(二) 「外界」の概念を以て其教育學の前提とせり</p> <p>(三) 主として育成材料に對して興味を有せり。</p> <p>(四) 知力的の人なり。</p> <p>(五) 反省的人なり。</p> <p>(六) 多方向大にして語學の知識に富み思想明瞭且つ整然たり。</p> <p>(七) 他國語の翻譯家として殊に補充的人なり而して系統的教育學の始祖なり。</p> <p>(八) 觀察材料を以て其の教授を扶助せり「オルビスピクトス」を著はしつるも是なり。</p> <p>(九) 人を完全にして知らしめんことを務めたり。</p> <p>(十) 學校の外部秩序の爲めに大効を致せり。</p> <p>(十一) 主として人に從ひ時に從ひ材料に從ひて學校を系列せり。</p> <p>(十二) 總合法を取れり。</p> <p>(十三) 主として演繹的なり。</p> <p>(十四) 總べて原由より教へんと欲せり。</p>	<p>ペスタロッツチは</p> <p>(一) 獨學自修せり。</p> <p>(二) 「内界」の概念を以て其教育學の基礎とせり</p> <p>(三) 教育作用を人間心意の諸原力に向けたり。</p> <p>(四) 感情的の人なり。</p> <p>(五) 想像的人なり。</p> <p>(六) 單方狹隘にして語學の知識に乏しく文意信屈且つ不明瞭なり。</p> <p>(七) 主として詩人なり其の著「エンハル」及び「ゲルト」を見たり知るべし而して是れ又雅文的國民小説の始祖たる所以なり。</p> <p>(八) 形式と數量とを重んじ之を以て必須なる育成方便なりとせり。</p> <p>(九) 人を完全にして知らしめんことを務めたり。</p> <p>(十) 學校の内部秩序の爲めに大効を致せり。</p> <p>(十一) 宗教算術及び言語の三種主要訓練の育成價值を重んじたり。</p> <p>(十二) 分析法を取れり。</p> <p>(十三) 全く歸納的なり。</p> <p>(十四) 總べて知識の中樞點は觀察する所の主觀なりと曰へり</p>

図3.『北海道教育雑誌』第45号の記事 (ページをまたいでいる部分を合成)

<p>○ペスタロッツチ及コメニウス 教授はるちんげる氏は此の二大教育家を左の如く比較對照せり。ホルテンゲル</p>	
<p>コメニウスは</p> <p>(一) 大學の教育を受けた り。</p> <p>(二) 「外界」の概念を以て、其の教育學の前提とせり。</p> <p>(三) 主として育成材料に對して興味を有せり。</p> <p>(四) 知力的の人なり。</p> <p>(五) 反省的人なり。</p> <p>(六) 多方向大にして、語學の知識に富み、思想明瞭、且つ整然たり。</p> <p>(七) 他國語の翻譯家にして、殊に補充的人なり。而して系統的教育學の始祖なり。</p> <p>(八) 觀察材料を以て、其の教授を扶助せり「オルビスピクトス」を著はしつるも是の故なり。</p> <p>(九) 人を完全にして、知らしめんことを務めたり。</p> <p>(十) 學校の外部秩序の爲めに大効を致せり。</p> <p>(十一) 主として人に從ひ、時に從ひ、材料に從ひて、學校を系列せり。</p> <p>(十二) 總合法を取れり。</p> <p>(十三) 主として演繹的なり。</p> <p>(十四) 總べて原由を教へんと欲せり。</p>	<p>ペスタロッツチは</p> <p>(一) 獨學獨修せり。</p> <p>(二) 「内界」の概念を以て、其の教育學の基礎とせり。</p> <p>(三) 教育作用を、人間心意の諸原力に向けたり。</p> <p>(四) 感情的の人なり。</p> <p>(五) 想像的人なり。</p> <p>(六) 單方狹隘にして、語學の知識に乏しく、文意信屈、且つ不明瞭なり。</p> <p>(七) 主として詩人なり、其の著「エンハル」及び「ゲルト」を見たり知るべし。而して是れ又雅文的國民小説の始祖たる所以なり。</p> <p>(八) 形式と數量とを重んじ之を以て必須なる育成方便なりとせり。</p> <p>(九) 人を完全にして、知らしめんことを務めたり。</p> <p>(十) 學校の内部秩序の爲めに、大効を致せり。</p> <p>(十一) 宗教、算術、及び言語の三種主要訓練の、育成價值を重んじたり。</p> <p>(十二) 分析法を取れり。</p> <p>(十三) 全く歸納的なり。</p> <p>(十四) 總べて知識の中樞點は、觀察する所の主觀なりと曰へり</p>

図4.『奈良県教育会雑誌』第25号の記事 (ページをまたいでいる部分を合成)

<p>◎ペスタロッツナ及びコメニウス</p> <p>教授ホルンケル此の二大教育家を左の如く比較對照せり</p>	
<p>コメニウスは</p> <p>(一) 大學の教育を受けたり</p> <p>(二) 「外界」の概念を以て其教育學の前提とせり</p> <p>(三) 主として育成材料に對して興味を有せり</p> <p>(四) 知力的の人なり</p> <p>(五) 反省的人なり</p> <p>(六) 多方向大にして語學の知識に富み思想明瞭且つ整然たり</p> <p>(七) 他國語の翻譯家として殊に補充的人なり而して系統的教育學始祖なり</p> <p>(八) 觀察材料を以て其の教授を補助せり「オルビスビクトス」を著ししつるも是なり</p> <p>(九) 人を完全にして知らしめんことを務めたり</p> <p>(十) 學校乃外部秩序の爲めに大功を致せり</p> <p>(十一) 主として人に從ひて時に從ひ材料に從ひて學校を系列せり</p> <p>(十二) 總合法を取れり</p> <p>(十三) 主として演繹的なり</p> <p>(十四) 總へて原由より教へんと欲せり</p>	<p>ペスタロッツナは</p> <p>(一) 獨學自然せり</p> <p>(二) 「内界」の概念を以て其教育學の基礎とせり</p> <p>(三) 教育作用を人間心體の諸原力に向けたがり</p> <p>(四) 感情的の人なり</p> <p>(五) 想像的人なり</p> <p>(六) 單方狹隘にして語學の知識に乏しく文意信屈且不明瞭なり</p> <p>(七) 主として詩人なり其の著エソハル、及びゲルトロドを見て知るべし而して是れ又雅文的國民小説の始祖たる所以なり</p> <p>(八) 形式と數量とを重んずるを以て必須なる育成方法を考へたり</p> <p>(九) 人を完全にして知らしめんことを務めたり</p> <p>(十) 學校の内部秩序の爲めに大功を致せり</p> <p>(十一) 宗教算術及び言語の三種主要訓練の育成價值を重んじたり</p> <p>(十二) 分解法を取れり</p> <p>(十三) 全く歸納的なり</p> <p>(十四) 總へて知識の中樞點を觀察する所の主觀ありと曰へり</p>

図5.『島根県私立教育会雑誌』第122号の記事（ページをまたいでいる部分を合成）

<p>◎ペスタロッツナ及びコメニウス</p> <p>教授ホルンケル此の二大教育家を左の如く比較對照せり（島根県私立教育會雑誌）</p>	
<p>コメニウスは</p> <p>(一) 大學の教育を受けたり</p> <p>(二) 「外界」の概念を以て其教育學の前提とせり</p> <p>(三) 主として育成材料に對して興味を有せり</p> <p>(四) 知力的の人なり</p> <p>(五) 反省的人なり</p> <p>(六) 多方向大にして語學の知識に富み思想明瞭且つ整然たり</p> <p>(七) 他國語の翻譯家として殊に補充的人なり而して系統的教育學始祖なり</p> <p>(八) 觀察材料を以て其の教授を補助せり「オルビスビクトス」を著ししつるも是なり</p> <p>(九) 人を完全にして知らしめんことを務めたり</p> <p>(十) 學校の外部秩序の爲めに大功を致せり</p> <p>(十一) 主として人に從ひて時に從ひ材料に從ひて學校を系列せり</p> <p>(十二) 總合法を取れり</p> <p>(十三) 主として演繹的なり</p> <p>(十四) 總へて原由より教へんと欲せり</p>	<p>ペスタロッツナは</p> <p>(一) 獨學自然せり</p> <p>(二) 「内界」の概念を以て其教育學の基礎とせり</p> <p>(三) 教育作用を人間心體の諸原力に向けたがり</p> <p>(四) 感情的の人なり</p> <p>(五) 想像的人なり</p> <p>(六) 單方狹隘にして語學の知識に乏しく文意信屈且不明瞭なり</p> <p>(七) 主として詩人なり其の著エソハル、及びゲルトロドを見て知るべし而して是れ又雅文的國民小説の始祖たる所以なり</p> <p>(八) 形式と數量とを重んずるを以て必須なる育成方法を考へたり</p> <p>(九) 人を完全にして知らしめんことを務めたり</p> <p>(十) 學校の外部秩序の爲めに大功を致せり</p> <p>(十一) 主として人に從ひて時に從ひ材料に從ひて學校を系列せり</p> <p>(十二) 總合法を取れり</p> <p>(十三) 主として演繹的なり</p> <p>(十四) 總へて知識の中樞點を觀察する所の主觀ありと曰へり</p>

図6.『山陰之教育』第21号の記事（ページをまたいでいる部分を合成）

しかし、全体として見ると、やや乱暴な比較であると言わざるを得ない。④と⑤は、両者のパーソナリティーの比較といえるが、たしかに、コメニウスが頭と舌と手を問題にしたのに対し、ペスタロッツは頭と心と手を問題にしたわけで、後者の方が心情的側面を重視したのは認められるにしても、コメニウスのテキストにも随所に感情的な表現は認められる。また、⑤については、ペスタロッツにも内省的なところは多々認められるし、晩年のコメニウスが予言に傾倒したのなどは、その想像力の故かもしれない。教育觀の比較についても、⑪は、ペスタロッツに形式陶冶論者の姿を見ようとする意図がみえる。コメニウスについての理解が限られていたことは考慮に入れなければならないが、コメニウスには世界・精神・聖書という「神の三書」を感覚・理性・信念と照応させるという教育内容論と能力論がある。

⑫と⑬では両者の方法論が対比され、コメニウスは演繹的で総合的、ペスタロッツは帰納的で分析的とされている。⑫で、コメニウスが演繹的であるとされるのは、『大教授学』の冒頭で物事の根底にある不動の自然に基づいて考察するという言及があることに由来すると

思われ、その点で大きな問題はない。しかし、⑬については問題がある。コメニウスは、分析と総合の得失を論じたうえで、類比の方法の重要性を強調しているからである。

このほか、①、⑥、⑦にもやや問題がある。まず、①の学修歴について、コメニウスがドイツのヘルボルンとハイデルベルクで大学教育を受けたのは正しい（ヘルボルンの学校は存続していない）が、ペスタロッチはチューリヒ大学を卒業している。⑥は言語的知識に触れているが、ペスタロッチの草稿には母語のドイツ語の記述にも相当の誤りがあることからすれば、誤りではないといえるが、⑦は当時のコメニウスについての知識の不足が影響しているだろう。ペスタロッチが『リーナハルトとゲルトルート』等の小説を著したのに対し、コメニウスは翻訳をもっぱらにしたとされているが、コメニウスは、チェコ語文学の古典とされる『地上の迷宮と心の楽園』を著し、詩作も多い。

あら捜しのようになってしまったが、この記事の比較項目の立て方は整除されておらず、比較の根拠になる事実の把握も不十分である。しかし、簡潔で一目瞭然な比較は、教職関係の試験などに役立つものと見なされたのだろう。この記事がかなり反響を生んだであろうことは、多くの地方教育会雑誌に転載されたことが雄弁に物語っている。

ここにあげる5誌以外にも転載されている可能性もあるが、『教育時論』からわずか1か月後の1896年5月の『埼玉教育雑誌』第153号、3か月後の同年7月に発行された『北海道教育雑誌』第45号、翌8月の『奈良県教育会雑誌』第25号、同月の『島根県私立教育会雑誌』第122号、そして翌年2月の鳥取県の『山陰之教育』第21号に、若干の語句の入れ替えはあるものの、ほとんど同様の記事が掲載されている。『山陰之教育』の記事の末尾には「(島根県私立教育会雑誌)」とあり、隣県での掲載に刺激されたのがうかがえる。『山陰之教育』の創刊は号数からも明らかなように他県に比べると遅い（創刊は明治28年6月）が、当時の教育動向の摂取には熱心であった。たとえば、同誌第8号（1896年1月）には、「ペスタロッチ以前の実物教授主義」（三村徳蔵）と題された論文も掲載されている（ただし、ここにはラブレール等への言及はあるが、コメニウスには触れられていない）。ここでとりあげた第21号にも「独国教育変遷の有様」と題されたヘルバルト派についての解説記事がある。地方教育会における西洋教育思想の受容動向の調査は意味のある課題である。

さて、ここでいわれているホルチンゲルだが、ペスタロッチとの文通があり、『若者のより良い教育と形成に向けた最近の試みに関するより詳細な洞察についてシュルテス教授に宛てて』（*Ein Wort an Herrn Professor Schultheß über desselben genauere Einsicht der neusten Versuche einer bessern Erziehung und Bildung der Jugend*, Zürich: Heinrich Geßner, 1810.）という著作でコメニウスとペスタロッチについて論じているといった事実からして、スイスの歴史家ヨハン・ホットティンガー（Johann Jakob Hottinger, 1783-1860）のことだろうと思われる。具体的に、どの論考をもとにこの記事が書かれたのかは調査がつかない。

石田新太郎, 「コメニウスの性行及学説」(『教育実験界』, 育成会, 第1巻第4号, 1898年4月。) *

西洋近世の教育思想が, ルターによる学校設立, メランヒトンらによる人文主義の導入, イエズス会の対抗改革, ベーコンの科学的精神の普及という4段階を経て発展したとし, コメニウスをベーコンの徒として位置づけるとともに, ビベスやラートケからの影響を指摘している。人名表記では, KomenskiあるいはKomenskyとも書かれるとし, 出身地はニヴニツェとされている。生涯の紹介は『開かれた言語の扉』が諸国語に翻訳されたところで終わり, (未完結)と記されているが, 同誌では続編は見当たらなかった。

石田新太郎(1870-1927)は, 慶應義塾大学部文科に学び, 卒業後は独学で教育学や心理学を学び, 明治期の代表的な教育学者である谷本富(1867-1946)と論戦したことで知られる。さらに陸軍士官学校に学び, 東京陸軍幼年学校, 広島陸軍幼年学校に勤務し, 台湾総督府国語学校教頭, 朝鮮総督府視学官を歴任し, 慶應義塾大学の理事も務めた。

湯武居士, 「教育大家小伝ヨハン, アモース, コメニウス」, (『教育壇』, 開発社, 第20号, 1898年9月, 第22号, 1898年11月, 第23号, 1898年12月。) *

『教育壇』の「雑記」に3回にわたって連載。この雑記には, ルソーの『エミール』の紹介も収められている。1899年に発刊された『日本教育』の祝辞には「開発社社長 湯武居士」とある。これは湯本武比古のことであろう。

ヨハンがYohanと記されていたりするが, コメニウスの出身地はニヴニツェ, チェコ語名はコメンスキーであると紹介され(ただし, 表記はKomenskýではなくKomensky), 没年も1670年となっている。また, 『大教授学』第20章の学識の教授法の9原則が紹介されているが, 記述は前述の本荘の著作におけるそれとは異なっている。コメニウスの教育思想史上の位置づけについては, その自然主義や感覚を重視した教育を評価する一方, 非キリスト教的テキストの制限については古典の価値を見誤ったものと指摘している。これはクイックなどが論じた問題である。

「コメニウスの教育大全(英訳)」(『教育壇』, 開発社, 第24号, 1899年1月。) *

「教育大家小伝」で3回にわたってコメニウスがとりあげられたのに続く『教育壇』第24号の新刊紹介のコーナーで, 教育史家モーリス・キーティング(Maurice Walter Keatinge, 1868-1935)による『大教授学』の英訳が紹介されている(出版年は, 1896年ではなく1897年とされている)。これも湯本が執筆したとみてよいだろう。

静観子,「近世教育改革家列伝(其一) コメニウス」, (『日本教育』, 日本教育社, 第1号, 1899年1月, 第2号, 1899年2月。) *

『日本教育』創刊号及び第2号の連載記事。コメニウスは「近世教育の基礎を置きたる者」と位置づけられている。生涯の解説はところどころにコメニウス自身の回想を織り交ぜるなどの工夫が見られるが、やや誤りも散見される。

ヘルボルン修学後に著した『簡易文典示教』(*Grammaticae Facilioris Praecepta*) という著作がライプツィヒから出版されたという記述はプラハの誤りである。三十年戦争のさなかに妻に続いて「一子また相継ぎて逝きぬ」とあるのも2人の子を失っているもので正しくない。

また、『開かれた言語の扉』は『開かれざる言葉の門』と誤って訳されているが、「門」というのも正しくない。コメニウス自身、さまざまな表題を考える際に門と扉を使い分けているからである。ただし、当時の英語のテキストでは、原題のJanuaはDoorともGateとも訳されており、この点はやむを得ないところだろう。

スウェーデンの庇護のもとで教授学研究にあたったコメニウスが,「『大教授学』の原則を, 語学教授に関係させて, 一教授書を書くこととし, 語学教授の深泥中に, 8年間もがきぬ」という記述は, コメニウスが晩年に集成した『教授学著作全集』中の回想に見られるが, ここで著された『言語の最新の方法』は『大教授学』とは異なる方法論に基づいて書かれている。このほか, 晩年にアムステルダムに移ったコメニウスが,「政治上の意見を述べたるもの, 法王を諷刺したりとて非難起り」というのは, 予言信仰に基づいて著した『闇のなかの光』や『闇からの光』のことだと解される。

ところで, この論考では, 長くコメニウスのパトロンであった豪商のルイ・ド・イエールの息子ローレンス・ド・イエールから支援を得て, 孤児院を興し,「孤児院のほか, 氏は富家の子弟を教えることによりて, 十分の収入を得」という記述がある。

当時入手可能であった, 上述のリヒター編『大教授学』に付せられたゾウベクの解説には上記のような記述はなく, 出生地の紹介も異なる。ローリーの研究書(1890年第2版)は, コメニウスが晩年を過ごしたアムステルダムで著した『教授学著作全集』第4巻に収められた論考を詳しく紹介しているが, ド・イエール家の援助と教授で生計を立てたという以外の特別な記述はない。ローリーは, 当時はまだ研究者レベルでも参照対象であったラウマーの『教育学史』をたびたび引用しているが, そこには, 晩年をアムステルダムで過ごしたコメニウスが,「その子どもを教えた裕福な商人によって手厚く保護された」という記述があるだけである。近代的なコメニウス研究の開拓者とされるヤン・クヴァチャラ(Ján Radomil Kvačala, 1862-1934)が, コメニウス生誕300年の1892年に出版した『ヨハネス・アモス・コメニウス——その生涯と著作』(*Johann Amos Comenius: Sein Leben und Seine Schriften*, Leipzig: Julius Klinkhardt, 1892.)は, 19世紀におけるコメニウス研究の頂点とも見なされているが, そこにも孤児院云々という記述はなかった。藤田輝夫(1973-2004)は,

現在に至るまでもっとも詳細なコメニウスの伝記的研究とされるミラダ・ブレカシュタット（Milada Blekastad, 1917-2003）の『コメニウス——その人生，著作，運命に関する概括の試み』（*Comenius. Versuch eines Umresses von Leben, Werk und Schicksal des Jan Amos Komenský*, Praha: Academia, 1969.）を批判的に検証し、「コメニウス小史」（日本コメニウス研究会『日本のコメニウス』，第15号，2005年～第20号，2010年）を著しているが，そこでも孤児院を興したという記述はない。この出典が気になるところである。

コメニウスの学説については，とくにベーコンの影響を受けたことが強調され，「氏はラテン語の学習を新精神によりて改良せし点においては往を継ぎ，ベーコン氏の帰納法を教育に応用してその舞台を一変せし点においては来を開けり」と結ばれている。著者の静観子はペンネームであろうが，著者の特定はできなかった。

「コメニウス氏の肖像」，（『教育実験界』，第3巻第13号，育成会，1899年6月。）＊

巻頭にコメニウスの肖像（図7）が掲げられ，裏面に「コメニウス氏伝」がある。モラヴィアンという村の出身，ヘルボルン修学後にはオランダやイギリスを訪ねた等の，不正確あるいは未確認な事実の記述がある。『世界図絵』は「世界の図画即ち庶物指教の意」と説明されている。没年は1871年のままである。

この紹介は，日本の出版物にコメニウスの肖像が現れた嚆矢であろう。コメニウスは，生前から，著名な版画家のヴァーツラフ・ホラーをはじめ，レンブラント派の作家ユルゲン・オヴェンスらによって描かれ，イタリア・フィレンツェのウフィツィ美術館所蔵のレンブラント・ファン・レインによる老人の肖像もコメニウスを描いたもの

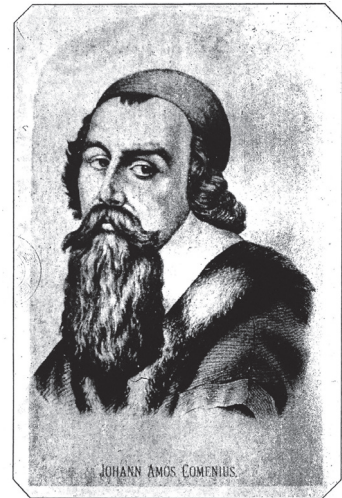


図7. 『教育実験界』第3巻第13号に掲載されたコメニウスの肖像

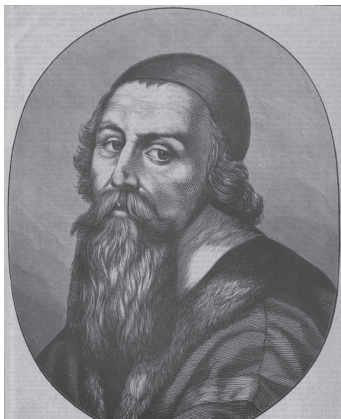


図8. マイクスナーによるコメニウスの肖像

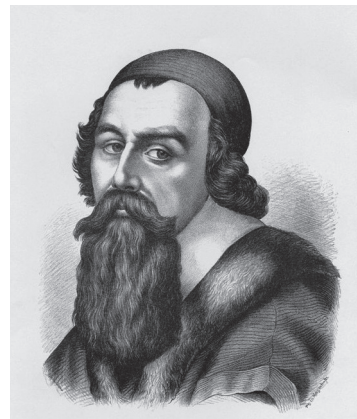


図9. マイヤーホーファーによるコメニウスの肖像

だという解釈があるが、18世紀末からチェコ地域の民族再生運動が始まり、19世紀の国民教育制度の成立にともなって教育史テキストが書かれるなかで、さまざまに描かれた。この肖像のオリジナルが何であったのかは興味をそそるところだが、プシェロフ・コメニウス博物館のヘレナ・コヴァージョヴァー氏に照会すると、大きな関心を寄せてくれた。不思議な符合というべきか、同氏は19世紀におけるコメニウスの肖像とその普及について研究していたのである。

コヴァージョヴァー氏によれば、上体を右に向け首を左に向けて正面を向いたポーズのコメニウスの肖像は、この時代に複数制作されたという。そのうちの最初ものと考えられるのが、チェコの画家カレル・マイクスナー（Karel Maixner, 1840-1881）が1871年にチェコの雑誌『クヴィエトナ』（花）のために制作した肖像画である（図8）。この肖像は、何人かの作家によって用いられた。図9は、1884年頃にテオドール・マイヤーホーファー（Theodor Meyerhofer, 生没年の調べ付かず）が、リンドネルによるコメニウスの『大教授学』なども出版した、ウィーンのA. Pichlers Witwe & Sohnのために制作したものである。このほか、チェコの画家フランティšek・バルテル（František Bartel, 1849-1949）もマイクスナーの構図をもとにした作品を残している（1871/2の作だが、解像度の低い画像しか得られなかったため、ここでは割愛する）。バルテルの描いた肖像画は、コヴァージョヴァー氏によれば、チェコではマイクスナーの作品よりも普及したという。



図10. ヴィリーメクによる
コメニウスの肖像

このほか、チェコの画家ヤン・ヴィリーメク（Jan Vilimek, 1860-1938）が1891年に描いた作品（図10）も明らかにマイクスナーの採用した構図をもとにしたものだろう。これらの作品の構図はいずれも『教育実験界』のものに似ているが、もっとも表情が似ているのは図3のマイヤーホーファーのものであるのは明らかだ。コヴァージョヴァー氏もウィーンで出版されたものの方が当時の日本人にはアクセスしやすかったのではないかという。ただし、マイヤーホーファーによる肖像はそのまま用いられたのではなく、日本で新たに制作されたものであろう。かなり忠実だが、表情が微妙に異なっている。

「コメニウス氏小伝」, (『日本之小学教師』, 第1巻第5号, 国民教育学会, 1899年8月。) *

同誌の教育家伝記コーナーの一部。第1巻第5号では、巻頭にアメリカの心理学者、教育者、神学者で、1892年に日本に招聘されたジョージ・トランブル・ラッド（George Trumbull Ladd, 1842-1921）の肖像が掲載されているが、教育家伝記の最初にラッドがとりあげられ、そのあとに、コメニウス、ペスタロッチ、ヘルバルト、ディースターヴェーク、

フランケの紹介が続いている。コメニウスは、「広大深奥なる哲学の理論を初めて実地の教授法に応用」した「近世教育学の預言者」と評されている。生地はコムニャとされ、没年は1671年、『世界図絵』は「世界の図絵」と訳されている。著者名はない。

熊田長太郎、「コメニウス伝」、(『右尚会雑誌』, 第2号, 宮城県師範学校右尚会, 1900年5月。) *

コメニウスをペスタロッチとともにヘルバルトに始まる科学的教育学の柱礎と位置づけているのは、この時代のごく一般的な記述である。「秀才驚くべく加うるに温和寛容の一学者」というメシエレイ（ミシュレのこと）の評が引かれている。

出身地はコムニャ説がとられ、『世界図絵』は実物示教と訳されている。コメニウスに影響を与えた存在としては、「宗教改革の主唱者たるルター、帰納哲学の鼻祖たるベーコン及び教育者として有名なるラートケの3人」であるとされている。ルターがあげられているのは珍しい。それに続いて『大教授学』の要点の紹介があるが、そこには要約や敷衍が見られる。教授的的確性を論じた第16章の9つの基礎が他の記述を取り入れて11条になっており、学習指導の実際を論じた第19章20節からは6項目が抜粋され、訓練法の解説としては『大教授学』第26章から4項目が抜粋されている。第27章にある学校系統の紹介がごく簡潔なのに対して、小学校の目的については、第29章であげられている12の教育課題があげられている。最後はコメニウスとルソーの自然観の相違、『世界図絵』に見られる実物教授の工夫、初等段階からの理科や地理の学習の重要性について言及している。本稿で再掲した本荘の『教育古典』とは用語が異なっており、『大教授学』の紹介は別の文献によっていたと考えられる。

本稿の段階で、著者の熊田長太郎の生没年の調べはつかなかった。同誌の別の寄稿には、名前に「会員」、「同本四」、「会計報告」と付せられていることから、宮城県師範学校右尚会の運営に中心的に関わっていたと思われる。

この記事は各地の高等師範学校、師範学校、旧制中学校、旧制高等女学校等の雑誌に西洋教育に関する埋もれた論考があることを想像させるものといえる。本稿で後述するコメニウスについての論考に関して京都府立第一高等女学校（現、京都府立鴨沂高等学校）同窓会の鴨沂会館を訪問して『鴨沂会誌』を調査したが、多くはないとはいえ、校長の鈴木博也による「プラトンの女子教育観について」のような論考があった（第59号（大正15年12月））。

「教育八大家小伝」、(格致学会編輯、『教育学术界』, 第2巻第3号, 同文館, 1901年1月。) *

著者名はなく「記者」となっている。この論考は、同誌の第2巻第4号（1901年2月）、第2巻第5号（1901年3月）と3回にわたって掲載された連載の第1回で、「欧州八大教育家」として、ルター、メランヒトン、ルソーとともにコメニウスがとりあげられ、次号以降で、汎愛派のザルツマンとカンペ、ペスタロッチ、最後にフレーベルがあつかわれている。



図11. 『教育実界』第2巻第3号に掲載されたコメニウスの肖像

ここでの8大家という選別がどのような視点で行われたのかについての記述はない。汎愛派の祖と目されるバゼドウについてはザルツマンの項で簡単に説明されている。同誌第2巻第3号の巻頭には8名の肖像が綴じ込みで収められているなど、かなり力が入った企画であったと思われる（図11）。この肖像は『教育実界』に掲載されたものとよく似ているが、人名の字体が異なり、ドイツ人として紹介され、表情も微妙に異なる。

コメニウスの出身地はニヴニツェとされているが、没年は1671年のままである。『簡易文典示教』の出版地がライプツィヒという『日本教育』と同じ誤った記述も見られる。他方、フランスの歴史家ミシュレのコメニウス評が引かれている。自然主義から実物教授への道を開いたという記述は他の論考と共通している。『世界図絵』の書名は『世界図書』となっている。

新町徳兵衛, 「コメニウスの教育説」, (『日州教育会雑誌』, 第25号, 1901年4月, 第26号, 1901年5月, 第27号, 1901年7月, 第29号, 1901年11月。) *

コメニウスの『大教授学』を紹介した連載記事である。人名表記には、コメニウス、コメニユス、コメニース、コメニウスと揺らぎがある。第25号の記事には（承前）とあり、第25号以前から連載が始まっていることは疑いないが、宮崎県立図書館をはじめ、全国の大学図書館および公立図書館の蔵書をインターネット検索した限りでは、同誌の第1号から第18号、第20号から第24号の所蔵は確認できず、本稿の段階ではこの連載記事の全容はつかめなかった。

第25号の記事の冒頭には、前回の内容として、「第三章に於ては小学校のことに就きて少し許り説明しましたが、本章に於ては少々詳かに説明いたしませう」、「学校では何人も……男子も女子も富者も貧者も将又、何れの国人も平等一様に教育しなければならぬ」との記述がある。これは『大教授学』であらゆる者への教育が訴えられた第9章と対応し、連載はそれ以前の章の内容紹介から始まっていたと考えられる。第28号には記事の掲載がなく、第29号の記事のあとには、著者による次のような微笑みを誘う記述があり、連載が29号で完結しているのは間違いない。

「コメニースの教育説は以上で以て御しまひになりました、尤も右の外に訓練の事につきて論じた箇所がありますが餘り長くなりますので今度はここで完結を告げることに致します、

面白くもないものを長々と書き立てて貴重なる紙面をげがしましたのは甚だ恐縮に存じます（新町生）。」

第25号の記事は「第四章 小学校」「第五章 教授の原則」があつかわれ、第26号の記事の冒頭には「第六章 教授の原則（前章の続き）」、第27号の記事の冒頭には「第七章 教授法」、第29号の記事の冒頭には「第七章 教授法（続き）」とあるが、これは『大教授学』の章立てとは対応していない。以下、簡単に内容を整理しておく。

巻数	記事の章題	『大教授学』における対応する章節
25	第四章 第五章	第29章第6節で示された12の教育内容（ただし、記事では15項目にまとめられている） 6 学年制や教科書についてあつかわれた同章第8節 第12章第18節の知能観についての言及 第14章の自然主義的教育の原則の要約 第16章の教授と学習の確実性についての9原則 第17章の教授と学習における平易の原理の10原則
26	第六章	第18章の教授と学習の着実にかかわる10原則 第19章の教授に簡便さをもたらす8原則 太陽を比喩に用いた同章第13節をほぼそのまま紹介
27	第七章	第20章の知識の教授法の9規則 第21章の技術の教授法に関する11規則 第22章の言語の教授法に関する8規則 『前庭』、『扉』、『宮殿』、『宝庫』といった教科書について
29	第七章（続き）	第23章の道德の教授法に関する16法則（記事では15） 第24章の敬虔の教授法の要約（21の規則についての紹介なし）

確認できた範囲になるが、この連載では、『大教授学』の第12章、第14章、第16章から第24章及び第29章が紹介されており、おそらく未確認部分では第9章以前があつかわれていると考えられる。この構成は本荘の『教育古典』とは異なっている。テキストにはドイツ語や英語の語の記載はなく、時期的にはキーティングによる英訳の『大教授学』を参照できたと思われるが、典拠については断定できない。

しかし、全容がわからないために分量は比較できないが、この時期においては『大教授学』をもっとも網羅的にあつかった論考といえる。もとより、翻訳ではないために抜粋と要約であり、コメニウスがあげた規則はいくつかがまとめてひとつにされたり、あるいは他の箇所と言及が加えられたりしている。また、かなり恣意的な解説も加えられている。たとえば、25号で教育内容に言及したうちの音楽については、「唱歌は国民たる者が是非知らなければならぬものでこれに依りて愛国心を奨励する」とあるが、『大教授学』の対応箇所にそのような言及はない。

この連載記事の著者の新町徳兵衛は、この雑誌の第34号に「カントの倫理学の大意」、第35号に「カントの倫理学」を寄稿しており、哲学や倫理学に相当な素養のある人物であると考えられた。著者についての調査は容易ではないと思われたが、新町が明治を代表する哲

学者の井上円了の門下生であることはすぐにわかった。井上は、哲学館大学（現在の東洋大学）での活動を退いたのち教育勅語の普及を図る修身教会の活動に注力して全国を行脚したが、その旅行記というべき『南船北馬集』の一部がインターネットに掲載されており、それが検索にかかったのだった。さらに、新町と哲学館をキーワードに検索したところ、旧制成田中学校に関する論文から新町が同校で教鞭をとっていたことが言及されていた。

現在の成田高等学校の前身である成田中学校は、成田山新勝寺貫主の肝煎りで明治20年に設立された成田英漢義塾にその歴史がさかのぼられる。同校は、明治31年に私立の尋常中学校として認可され、翌年の中学令により成田中学校となった〔寺澤 1999：41, 42, 46, 47〕。寺澤美代子は、「コメニウスの教育説」が現れる2年前の明治32年当時の同校の資料について言及しているが、同年4月の教職員表によれば、新町は漢文倫理担当の教諭として勤務している。序列は校長心得に次ぎ、俸給は40円、哲学館教育部卒業で文部省教員免許を有し、明治7年9月生まれ、山口県平民と記されている〔同：49〕。寺澤は同年の授業日課表も紹介しているが、新町は倫理、漢学、地理を担当している。新町の同校での在職は1年であった⁽³⁾。

哲学館と倫理といえば、いわゆる哲学館事件が想起される。明治32年、哲学館は、それまでは官立の高等師範学校卒業者にのみ認められていた中等教育の無試験検定資格を認可されたが、倫理科の卒業試験に対して視学官から疑義が出され、文部省は明治35年暮れに同校への認可を取り消した。井上円了の『南船北馬集』での言及は、この連載から後のことであり、本論からそれるため注に入れておくが⁽⁴⁾、井上はその後京都府立第一高等女学校で教鞭をとったことが把握できた⁽⁵⁾。

エー・フォーゲルザング、「コメニウスの教案を論ず」、〔『実験教授指針』、金昌堂、第2巻第10号、1903年10月、第2巻第11号、1903年11月。〕＊

コメニウスの『大教授学』の第29章「母国語学校の原型」の第6節で示された12項目を教案（Lehrplan）として把握し、それを19世紀ドイツの教育実践家フリードリヒ・デルプフェルト（Friedrich Wilhelm Dörpfeld, 1824-1893）の『教案の理論のための基本』（*Grundlinien einer Theorie des Lehrplans*, 1873）と比較し、批判を加えている。

コメニウスには体系的な教授法を創始したという功績は認められ、手工をとりいれることを論じ、ヘルバルトやヘルバルト派と同様に宗教や歴史の意義を重視した点は評価できるものの、体育の価値が十分に認められておらず、言語ではなく事物を学ぶことを主張したとされながら、その教材の配列法が実物教授から出発していないとして、「教案の属性排列においては、自家撞着の方法をとり、言語を真つ先にし、形式・事物とあたかも真理の反対に順序せしは、たまたま彼が教授主義における立脚地を、転々せりと評せざるべからず」と指摘されている。

著者のフォーゲルザングとこの論考の典拠については、調査した限りではわからなかった。ちなみに、コメニウスの生誕300年を機にドイツでコメニウス協会が結成され、その月報が発刊されるが、そこにはVogelsangという人物の寄稿が見られる。また、『福音派学校雑誌』（*Evangelisches Schulblatt*）という雑誌にもVogelsangによる「コメニウス協会とその意義」という記事が見られる（1906年）。ともあれ、この論考は、20世紀に入ると、単なる人物や思想の紹介という域を超えた専門的な論考が日本語で読めるようになったことを示しているだろう。訳者の「淡々子」はペンネームと思われるが、この詳細もわからなかった。

真田幸憲、『近世教育の母コメニウス』（金港堂書籍、1904年8月。）

モンローの『コメニウスと教育改革の始まり』をもとにしたもの。コメニウスについての日本最初の単行本と考えられる。モンローは、最初の体系的な幼児教育論ともいわれるコメニウスの『母親学校の指針』の英訳を1896年に出版し、アメリカの初代教育局長ヘンリー・バーナードの伝記も著している。この書は、16世紀のヨーロッパ教育、コメニウスの先駆者たち、コメニウスの前半生、教育改革者としての経歴、晩年、教育哲学、幼児教育、言語の学習、近代教育への影響、コメニウスの遺産の10章からなり、コメニウスを近代教育の祖と位置づける当時の主要な解釈を代表する著作といえる。

原著の出版からわずか4年後に邦訳がなされていることになるが、編集にあたっては、生涯の説明や教育学説がそれぞれ1章に括られ、原著の最後の2章も一括され、5章構成となっている。『大教授学』の解説は、教育の目的、自然に従ふの教育、教授法（理学・技術・国語・宗教）、学校論（幼児学校・母国語学校・ラテン学校・大学）、訓練の5部構成となっており、その後に幼児の教育（体育・心意の教育・道德及宗教教育）があつかわれ、「国語研究」としてコメニウスの他の著作の紹介がなされている。第5章では、19世紀後半におけるコメニウスの再評価について、ライプツィヒの教育図書館が『大教授学』のドイツ語訳者であるベーゲルの設立になることや、1891年のコメニウス協会の設立や研究誌が隔月で発刊されるに至ったことなども訳出されている。他方、原著には書かれている予言信仰などのコメニウスの非近代的と見なされる点が省略されるなど、改変が加えられている〔相馬2018：48〕。

著者の真田幸憲は、東京高等師範学校に学び、秋田県立横手中学校、秋田県師範学校、広島高等師範学校の教諭を歴任し、奈良女子高等師範学校教授となった。1919年から2年間欧米に留学している。著書に、『小学 修身教授法』（金港堂書籍、1902年）、『最新公民教育・公民科教授の方法』（目黒書店、1932年）、『ハイスクール研究—米国教育制度の実際—』（牧書房、新教育叢書、1949年）等がある。

下田次郎、『西洋教育家肖像』（金港堂書籍，1906年6月。）番外



COMENIUS, 1592-1670.

図12. 『西洋教育家肖像』に現れた
コメニウス

見開き右に教育家の略伝，左に右横倒しで肖像がレイアウトされた面白い本であり，そこにはホメロス，ソクラテス，プラトン，アリストテレス，ダンテ，ルター，ベーコン，ロック，フェヌロン，フランケ，ルソー，バゼドウ，カント，ペスタロッチ，シュライエルマッハー，ヘルバルト，フレーベル，ディースターヴェーク，ベネケ，ツィラー，スペンサー，ヴィルマン，ラインとともにコメニウスも紹介されている。

コメニウスの肖像（図12）は『教育実験界』とよく似ているが，これもやはり表情が微妙に異なる。それぞれにマイヤーホーファーの作品をもとに制作されたのだろう。『大教授学』の執筆年はチェコ語で書かれた『教授学』が書かれたと考えられる1632年になっており，『世界図絵』の執筆年は1年早い1657年になっている。

〔未完〕

〔注〕

- (1) 「1874年，モラヴァのチェコ人教師たちの運動によって，プシェロフの山の手にコメニウスの立派な像が除幕された（フライヘル・レオンハルディによる素描を『ライプツィヒ・イラスト新聞』で見ることができる）。」（XIVページ注）。
- (2) コメニウスの記念碑―。1871年のコメニウス没後200年の記念日に，〈コメニウス基金〉の名においてライプツィヒに中央図書館が創設された。プシェロフには1874年に記念碑が建立された。」（26頁）
- (3) 成田高等学校で校史の編纂を担当しておられる深田富佐夫教諭に照会したところ，「学校日誌」には明治32年4月7日に「本日ヨリ新町教諭出勤ス」とあり，4月10日付で第3学年主任となり，明治33年3月19日に依願免職，3月22日に「新町教諭本日出発ス」との記録があるということだった。なお，同校に『日州教育会雑誌』が部分的でも所蔵されていないかもあわせて照会したが，所蔵されていないとのことであった。
- (4) 『南船北馬集』第1集によれば，井上は，明治39年4月，東京を発って奈良各地で演説し，5月13日に京都に入っている。そこに次のような記述がある。

「十三日（日曜）雨。奈良より乗車して京都七条に着す。福井了雄，上村観光，松本雪城氏等の同窓諸氏の歓迎あり。河六旅館に少憩し，市役所議事堂に移りて演説す。演題は丙午の迷信にして，発起は哲学館関西同窓会なり。ときに大雨覆盆のごときも，聴衆，無慮千名の多きに及ぶ。散会後，八新亭において開きたる同窓の懇親会に出席す。田島教恵，新町徳兵衛等，哲学館出身者約二十名きたり会す。」[井上 1997a：212-213]。

新町は，京都で井上を迎えた一人であった。井上は，翌日から宇治を訪ね，その後，京都，奈良，大阪（茨木市）等を訪ねて講演を行い，22日に帰京した。新町はその見送りに立ち会っている [同：216]。

次に『南船北馬集』の第7集を見る。ここには、明治45年4月の京都と和歌山への旅行について記されている。井上は、和歌山を訪れたのち、5月3日に京都に入っている。翌日からの記録を抜粋する。

「四日 晴れ。午前、大谷派本山に参詣し法主に謁見す。これより府立第一中学校に至りて講筵す。校長は森外三郎氏なり。午餐は新町徳兵衛氏宅にて喫了し、午後、田島教恵氏創立の淑女高等女学校に移りて演述す。当夕、八新にて哲学館および東洋大学の同窓会あり。出会者は旧哲学館大学講師松本文三郎博士の外に、井ノ口泰温、大江文城、大崎竜淵、新町徳兵衛、原田秀泰、藤川吉次郎、田中了恵、上村観光、田島教恵、福井了雄、松本雪城、青樹了榮、市村与市、近藤寿治、高安博道、久保雅友。田島および久保両氏幹事たり。

五日（日曜） 晴れ。早朝、東大谷、本派本山、興正寺本山へ参詣し、大谷瑩亮氏、藤島了穂氏を訪問す。午後、府教育会の依頼に応じ、第一高等女学校にて講筵す。聴衆、堂に満つ。校長河原一郎氏尽力せらる。更に伏見町大谷派別院に至りて談話をなす。輪番松本雪城氏の案内にて松筑庵に憩い、晚餐を喫す。楼上の風光、吟賞するに足る。夜に入りて、仏教懇話会の依頼に応じて、市会議事堂において講演す。聴衆、堂にあふるるの盛會を得たり。」〔井上 1997b : 331-332〕

新町は、井上を自宅に招き昼食を供し、哲学館の同窓会に出席している。井上は、その後、6日夕方に急行で帰京したと記している。

- (5) 京都府立第一高等女学校の系譜を受け継ぐ京都府立鴨沂高等学校の校長を務め、『京都府立第一高女と鴨沂高校』（京都新聞出版センター、2017年）の著者でもある拝師暢彦氏に照会したところ、鴨沂会等編『創立六十周年記念誌』によれば、「新町徳之、明治38年12月28日～大正3年5月22日在職」（110ページ）と記載されているとのご教示をいただいた。後日、鴨沂会館を訪問し、第二次世界大戦期までの『鴨沂会誌』を閲覧したが、明治40年10月の『京都府立第一高等女学校創立第三十五年記念誌』には、明治40年10月現在の職員表があり、そこには校長河原一郎、教諭田中友二郎に次ぐ三番目に新町徳兵衛とあり、修身、漢文、教育、歴史の担当で、正八位とかかかれている（校長は七位、94ページ）。おそらく徳兵衛から徳之に改名したのだと思われる。『鴨沂会誌』によれば、退職後も京都市左京区下鴨下川原町に居住したことがわかる。

〔引用（参考）文献〕

石橋哲成・清水徹編、「日本におけるペスタロッター研究文献目録」、教育哲学会、『教育哲学研究』、第76号、1997年。

井上円了、『南船北馬集』第1編、『井上円了選集』、第12巻、井上円了記念学術センター、1997年（注では、〔井上 1997a〕と表記）。

井上円了、『南船北馬集』、第7編、『井上円了選集』、第13巻、井上円了記念学術センター、1997年（注では、〔井上 1997b〕と表記）。

井ノ口淳三、「コメニウス関係文献目録（2000年7月～2001年6月）」、日本コメニウス研究会、『日本のコメニウス』、第11号、2001年。

相馬伸一、『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀』、九州大学出版会、2018年。

寺澤美代子、「成田英漢義塾および旧制成田中学校における英語教育—明治時代—」、『日本英語教育史研究』、第14号、1999年。

〔謝辞〕

本稿を成すにあたって、佛教大学附属図書館、筑波大学附属図書館、奈良県立図書館、島根県立図書館、鳥取県立図書館の蔵書を利用した。また、佛教大学附属図書館参考調査係の

尽力で、本稿で紹介した各論考のコピーを入手することができた。チェコ共和国のプシェロフ・コメニウス博物館のヘレナ・コヴァージョヴァー氏には、『教育実験界』第3巻第13号巻頭のコメニウスの肖像の典拠についても教示いただいた。成田高等学校の深田富佐夫教諭、京都府立鴨沂高等学校元校長の拝師暢彦氏には新町徳兵衛についてご教示いただいた。また、同校の同窓会館である鴨沂会館には『鴨沂会誌』の閲覧を許可していただいた。記してお礼申し上げる。

〔付記〕

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「教育思想史のメタヒストリー的研究」（17H02673）による研究成果の一環である。本研究の過程で明らかにできなかった点は本文中に記載しているが、ご教示をいただければ幸甚である。

（そうま しんいち 教育学科）

2020年11月11日受理